

「無限の、その空」

織田雅道

(おだがどう)

私は空を見るのがあまり好きではない。

私はセラミックス製の人工心臓に取り替えてから数年が経った。たまに天気がよく、身体の調子がいい時には病院の屋上まで車椅子を押して貰い、その大きな限りなく透き通った真つ青な空を見る。

気分がよくなるはずなのだがそうでもない。頭がクラクラしてくるのだ。じいっと空を仰視していると、そこには無限が存在していることを知らされるからだ。

無限とは何だろう。

おそらく人間は無限というところに到達することは出来ないのだと思う。

世に「音はすれども姿は見えず。」という表現がある。それは「光は直進する。」ということと同じことだと思っていたが、そうではないらしい。物理学者でなくても小さな子供達からも否定されてしまう。

そこに物が見えていても、この学説によると、その物はそこには無いのだという。

光は直進しないらしいのだ。

周りの物の質量に影響され光が屈折して眼に入るのだという。にわかには理解できないが、そう言えば誰かに聞いた話があった。

それは、どこまでもどこまでも見通せる最

新鋭の望遠鏡が出来たでしょう。早速それを夜空に向けた学者が、遙か遠くに光り輝くのは星ではなく自分の禿げた後頭部なのだ。気づき、ビツクリ仰天するという話だ。

私はこの話から別の思いを抱く。人間は、この回り回って届いた光の軌跡が作り出す大きな輪から外には出られないのだと思う。ゴム鞠の表面を忙しく動き回る蟻は飛ぶことをしないから空間というものがあるのに気づかず、ゴム鞠の表面から外を想像出来来ないのと同じように人間もその光が作り出す、そのとてつもない大きな輪というべきなもの、すなわち「環」というものから外に出て行けないのだと思う。

多分、その環は人間が限界を想像出来る限界なのであろうと思う。

ご存じのように人間は有限なものだ。命は無限ではない。100歳を超えて生きていけないのはごく希だ。いずれ死ぬ。確実な死が待っている。

特に私の場合はそう遠くない日に死が確実にやってくる。大袈裟でなく、私は希望のない刹那に生きている。

空を見上げた時に感じる無限と、自分の有限とのアンバランスに頭がクラクラしてしまふ。私には限りなく淋しさが襲うのだ。

あまりにもちっぽけな人間の存在に憤慨すらしてしまう。

重要なことは、日々どう生きるかだ。

それは瞬間瞬間大切に生きることだと思

う。う。私がこうして生きているのは人間の英知の賜物だと思う。激痛に顔をしかめたり、近しい人に裏切られることも多々ある。それが日々繰り返し返している生活である。ここは無限などというところは無縁の世界だ。ここには点滴に自由を束縛された身体が歴然としてある。このけだるい危険な気分、死を予感するような気分慣れるということはない。どうすることも出来ない。それでいいと思う。この瞬間瞬間が「生」だと限りなく思うからだ。それを大切にしたい。有限の肉体がここにあるからこそ、そう思う。